

実践のまとめ（第3学年 道徳科）

魚沼市立広神中学校
教諭 小林 亮介

1 研究テーマ

道徳的判断力の育成

～ジレンマ型教材における道徳的判断を構造的に捉え直すことを通して～

2 研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

学習指導要領において、「道徳的判断力は、（中略）様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力である。的確な道徳的判断力をもつことによって、それぞれの場面において機に応じた道徳的行為が可能になる。」とある。道徳的な課題に限らず、問題の解決に向けて的確な判断をするには、問題を多面的・多角的に捉え、解決のために考慮すべき要素を洗い出し、一つ一つについて熟考し、総合的に判断することが不可欠である。

このような力は、日常生活における道徳の実践場面や、従来の道徳授業を通して、主に他者との交流の中から、これまで自分にはなかった「見方・考え方」に刺激を受けて育まれてくるものと考えられるが、この「見方・考え方」を問題から切り離し、一般化することで他の問題に応用していくという点について、道徳の授業ではあまり意識されてこなかったのではないかと。

そこで、ジレンマ型教材における様々な道徳的判断を分類・整理し、それらを構造的に捉え直すことで、他の問題に直面したときにも生徒が活用できる「見方・考え方」を獲得させたい。

(2) 研究テーマに迫るために

「ジレンマ型教材における道徳的判断を分類・整理し、一般化して捉え直す」

ジレンマに直面したときに取りうる判断は一般的に次の三つである。

- i、どちらかを選択し、それによって生じる不利益を引き受ける。
- ii、どちらも選択しないことで、不利益を生じさせない。
- iii、不利益が生じない、あるいはより少ない不利益で済む新たな選択を創造する。

しかし、これらの判断を下すには、その前提となる条件を正確に理解していることが不可欠である。そのため、実際の道徳的判断は、

前提条件の精査→ i、ii、iii（あるいはそのどれでもないiv）の判断

という手順になる。これらをジレンマ型教材における道徳的判断の分類から表出し、他の問題にも応用できる一般化した形に落とし込む。

(3) 研究テーマにかかわる評価

学習課題「（教授の問いに対して）自分の考えを書きなさい」に対する記述が、前半と後半で変容しているかを見取る。記述内容がiii、あるいは前提条件に言及する内容に変容

することが望ましい。前半にiii、前提条件に対する言及に当たる記述をしている生徒も、何らかの形で道徳的判断に対する見方・考え方が広がったことが伺える記述になることが望ましい。

3 指導計画

(1) 主題名 正しい行い（内容項目 A-5 真理の探究, 創造）

(2) 教材名 路面電車のジレンマ問題

（マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業〔上〕』）

(3) 主題設定の理由

① ねらい 道徳的判断のために必要な見方・考え方を理解する。

② 教材と児童（生徒）

路面電車のジレンマ問題は、一般的に「トロッコ問題」として知られるジレンマ問題の亜種であり、マイケル・サンデル教授が大学の講義のために作成したものだと考えられる。トロッコ問題との主な違いは、乗り物が路面電車であり、ジレンマ問題の選択を迫られる人物が、その運転手であるという点である。これにより、トロッコ問題では生じなかった「警笛を鳴らす」という選択の可能性が生まれ、
「そもそも路面電車が時速100キロで走行している状況が異常ではないか」という前提に対する疑問が生まれ、ジレンマ問題としては不備のある教材となっているが、かえってその不備が生徒に多様な見方・考え方を導き出させる上で有効な教材になっているとも言える。

生徒はこれまでの道徳の授業において、どのような題材にも正対し、教師の指示に従って学習課題に真剣に取り組む姿が見られる。一方で、教師の意図を読み取り、自分の考えよりも期待される解答を探って発言・記述しているようにも感じられることもある。今回の学習を通して、自由な発想やものの見方・考え方で教材を捉えることができるように支援していきたい。

(4) 本時のねらい

・学習課題に対する考えを分類・整理することを通して、問題解決に必要な「見方・考え方」は何かを探ろうとする道徳的判断力を育てる。

(6) 本時の展開

	□学習活動	○主な発問 ・予想される児童（生徒）の反応	◇留意点
導入 5分	□「ジレンマ」という言葉の意味について理解する。		◇言葉の定義について説明する。
展開 40分	□マイケル・サンデル教授の講義の映像を見て、本時の学習課題について知る。		◇映像を見せた後、教授の発言を文章で配り、範読する。

学習課題：（教授の問いについて、）自分の考えをノートに書きましょう。

□自分の考えをノートに書く。（1回目）

- ・「五人を助けるために、ハンドルを切る」（i）
- ・「ハンドルを切れば故意に人を殺すことになる。切らない。」（i）
- ・「どちらも人を殺すことになる。選べない。」（ii）

◇机間支援しながら記述の傾向を探り、何人かを指名し、理由を聞く。

□日本の大学生の考え（iii）を聞き、その考えについて近くの生徒と交流する。

- ・「なるほど、その手があった。」
- ・「その回答が認められると思わなかった。ずるい。」

□ジレンマの一般的な解決方法（i、ii、iii）について聞き、参考にしながら自分の考えを改めてノートに書く。（2回目）

- ・「警笛を鳴らして労働者に避けてもらおう」（iii）
- ・「ハンドルを人のいない方向に切り、脱線させる。」（iii）
- ・（他、iiiに当たる回答）

□ギャラリートークで他の生徒と意見交流する。

◇必要に応じて、特筆すべき意見は全体に紹介する。

□紹介された三つの方法（i、ii、iii）で、すべてのジレンマの問題が解決できるか考え、近くの生徒と交流する。

○紹介した三つの方法（i、ii、iii）で、すべてのジレンマの問題は、解決できるでしょうか？

◇挙手で傾向を確認し、できないと考えた生徒に理由を聞く。

□日本の大学生の考え（iv）を聞き、その考えについて近くの生徒と交流する。

- ・「なるほど、確かにそうだ。」
- ・「そんなのは屁理屈だ。与えられた課題の状況の中だけで考えるべきだ。」

◇問題解決の際は、そもそも前提が適切か、必要な情報はそろっているかなど、注意深く考えてみる事が大切であることを押さえる。

□ジレンマの一般的な解決方法（i、ii、iii、iv）について聞

- ・（iiiに当たる回答）
- ・（ivに当たる回答）
- ・（前提条件に対する言及）

	き。参考にしながら自分の考えを改めてノートに書く。(3回目)		
終末5分	□今日の授業の感想をノートに書く	<ul style="list-style-type: none"> ・ジレンマに直面しても、より良い方法を探ることが大切だ (iii) ・すぐに判断するのではなく、前提についてよく考えてみる大切だ (iv) 	

(7) 本時の評価

① 評価の視点

- ・他者との考えの交流から、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させていたか。

② 評価の方法

- ・記述の変容を見取る。
- ・交流の様子を観察する。

4 実践を振り返って

(1) 授業の実際

最初の判断は、全員が i に当たる判断 (29人がハンドルを切る、2人が切らない) をした。

	最後の判断	感想
A	iv 100kmで走っていれば電車に乗っている人も運転席に来て何か言うはず。運転士も客のことを考えていないから、自殺でもしようとしていたのではないか。	一つのことを考えると色々な解決策などが出てくるからおもしろいと思った。正解ではなく、その前のことを考える力が必要だと思いました。誤前提暗示にならないで、他のことも考えるのが大切だと思いました。
B	iv その日に工事をしているということを知っておくべきだった。時速100kmも出してはいけない。	とても難しい話だった。誤前提暗示はすごいと思った。
C	iii 警笛を鳴らす	前提を疑い、一人を殺す・殺さないの前にどうしたら助かるかよく考えて判断した方がいい。
D	iii 確かに前提の時点で間違っているけど、もうそういう状態になってしまっているのだから、自分は脱線させる。	正しく冷静に判断できる人間になりたいと思いました。
E	iii 誰もいない方向にハンドルを切れば、自分だけが犠牲になるだけだからその方がいい。	自分はどちらかを選択しないといけないと思っていたけど、i~ivのことを知ったら色々な視点から考えられると思った。
F	iii まず叫んで知らせ、ダメなら曲げるための棒を折ってタイヤに当ててブレーキ代わりにして減速させて、それでダメなら直進して段階を踏んでいって犠牲が0になるようにするためのものを選んでダメなら諦める。	いつか究極の選択をしなければいけない時がくると思うから、その時は平常心を取り戻すことから取り組んで、落ち着いて考えたいです。
G	iv 運転手はなぜブレーキの効かない電車を運転しているのか。乗る前に安全に運転できるか調べる必要があると思う。	自分が思っている以上にたくさんの意見があることがよくわかりました。誤前提暗示に騙されないで生きていきたいと思いました。
H	ただ簡単 スピードを落とせばいい	とても考えさせられる内容だった。とても難しかったし、視野を広げることが大事だと思いました。
I	iv 時速100kmも出る電車をまず作らない。工事が行われていることをちゃんと知っておく。	最初はどちらか選ばなければいけないと思って書いたけど、選択肢がどんどん増えて、最後に良い決断ができたと思います。前提を疑ってみることも大切なんだなと気づけて良かったです。
J	iv 出発する前にスピードを出しすぎないように確認して出発すれば良かった。	選択するときに他にも何か解決策がないか考えたり、前提を疑ったりして問題を解決すればいいとわかった。
K	iv 前提するものがそもそも間違っているなら選択肢は存在しないや、運転手が正しくないと言えるけど、脇に	正しい行いはどちらかと言われたときに、どちらも人を殺してしまうから正しくないと思った。そしたら、労

	行くかまっすぐ行くかなら犠牲の少ない脇に自分に行く。警笛などを鳴らせる鳴らす。	働者に避けてもらうや、そもそも前提が間違っているなど、自分が全く考えてもいなかった答えがあつてびっくりした。
L	iii 警笛を鳴らして、知らせる→電車停止後はその電車を調べる。	人間は、今ある選択肢の中だけで考えがちで、その選択肢以外の考えを考えてみたり、その人の聞き方を疑ってみることも身につける大切な能力だと学びました。
M	iv 安全ブレーキを取り付ける。	考えることができた。
N	iii 警笛を鳴らして危険を知らせる。	ジレンマは前提が間違っているとわからないことが多いんだと思った。選択肢の中だけにとらわれずに選択肢を増やしていきたい。
O	iv 路面電車の場合、電車には舵がないため、運転手の意志では変えられないため、選択肢は存在しない。	二つの与えられた選択肢にだけ、目が行ってしまった。まず、前提が間違っているのではないかと考えることが大事だと思った。
P	iv 100kmもスピードを出した運転手がおかしい。	最初に選んだものと今選んだもの、こんなにも時間をかけてしまっているけど、実際は一瞬で考えないといけないから難しい。
Q	iii 電車に乗客がいなければ脱線するのがいいと思う。	今回の課題はとても難しく、深く考えられて良かったと思います。最初の問いも答えるのが難しいと思いました。
R	iv 運転手が悪いと思う。	すごくたくさんの答え方があっておもしろいと思いました。色々な人の意見が聞けて良かったです。
S	iii 正しい方がどちらかや、諦めるその時間があるなら声を出して、労働者に伝えればいい	前提を疑うことが大切だと思った。詐欺などにかからないようにしたい。
T	(無記入)	自分の考えを作ることが大事だと思った。けど、まず前提がしっかりしているのかを考えることも大事だと思った。
U	問題が発生した後だったら ii か iii。前だったら iv	今はそんな状況になってないからなんとも言えるけど、自分がそんな状況になってたら冷静になって考えることができないから i を選んでるかなと思った。
V	iii 私は iii が良いと思う。理由は新しい案を考えたら人が死ぬということがなくなる可能性があるから。	ジレンマというのは、意外と身近にあることだと思った。誤前提暗示というのに最初は引かかかってしまったけど、それよりももっと良い考えを考えて、誰も死なせない案を出したい。
W	iv 上の学生のように考え、まず、こういう場面を作らない。→安全運転。電車の走る時間に工事をしない。ブレーキ点検。	ジレンマや選択肢だけでは考えることができないと分かった。まずは前提を疑い、色々な場合も考えながら解決していかなければならないと思った。
X	どれが良いのかは分からないけど、	自分は選択肢の中だけで判断していたけど、大学生の回答を聞いてこういう考えもあるんだなと思いました。でも本当に問題が起きたら選択肢の中だけで決めてしまうと思う。
Y	iii 警笛を鳴らす。	何か問題が起こった時は、色々な角度から物事を見て、広い視野をもつことが大事だと思った。

表1 生徒の最終的な判断と、授業後の感想

想定していた記述の変化（i → iiiあるいは前提条件に対する言及への変化）は全員に見て取ることができた。iii、あるいは前提条件に対する言及についても、新たな視点から問題を捉え直した内容の記述をする生徒がいた。（A B I Q）また、最後の判断の記述の場面では、机間支援の際に「電車に乗客は乗っていないのですか？」「脱線した場合、その先の安全は保証されているのですか？」という、教材の記述にとどまらない要素の質問をする生徒もいた。

しかし、協議会での話題で、今回の判断が「道徳的判断と言えるか？」という問題提起をいただいた。ジレンマにおける判断を構造的に捉えることが生徒の道徳的判断力を育むと考えて実践した授業ではあるが、道徳の授業で扱うべき内容であったかという疑問が残るのは否めない。また、3回繰り返される発問に対して、ほとんど生徒の回答が大学生の例と同じような内容の記述をしたことから、フリーライダーと思考の深まった生徒が記述から判別できないのではないかという意見もあった。

さらに、前提条件に問題意識をもつことで、不当な判断をさせられないことをねらいとした授業であったが、「なにせよ、その状況にあったら、判断をしなければならない」というような捉えをした生徒も多くいた（D F K S U X）。題材と自己との距離感が授業者の意図とは違ったため、そこについても授業構想の段階で考慮すべきだった。

(2) 研究テーマについて

道徳的判断力を育んでいく上で、「～の問題について考えるには、～と…を考慮に入れる必要がある」「～について判断するには、一般に～や…などの方法がある」という、「思考の型」とでもいべきものを体系的に示し、身に付けていくことが有効なのではないかと考え、今回の授業実践を行った。与えられた選択肢に留まらず、「何か他に方法があるのではないか」「そもそも～なのではないか」と思考を巡らせてみることは、直面する問題について多面的・多角的に捉え、最適解・納得解を導き出す上で重要な力になる。その意味では、生徒の問題を捉える視野を広げることができたのではないかと考えている。

しかし、そもそも「道徳的判断」とは何かという定義や、それを構成する諸要素についての授業者の考えが不十分であり、それを身につけるために必要なねらいや、学習課題の設定ができていなかったと言える。

(3) 今後の課題

今回の授業を通して、『生徒たちは「与えられた範囲の中だけで考えなければならない」というヒドゥン・カリキュラムによって、思考を制限されている』ということが明らかになった。これを克服するために、日々の授業の中で「他に選択肢はないか」「より良い解を導くために、教材の他に必要な情報は何か」を考えさせる必要がある。そういった授業を展開していくには、授業者は深い人間理解と教材理解、問題を多面的・多角的に捉えるための道徳的な視野を広げていくことが求められる。

また、生徒に「道徳的判断力」を育むために、その内容を明らかにする必要がある。道徳に限らず、より広く「判断力」に関する先行研究にあたりながら、日々の授業実践と合わせて見識を深めていきたい。